

## 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書刊行事業

和船建造技術を後世に伝える会  
代表 番匠 光昭

### はじめに

当会は、廃絶が危惧される木造和船とその建造技術の記録・収集、及び調査・研究を通して木造船そのものと、その建造技術とを後世に伝承していくことを目的に、平成 17 年より 3 か年にわたり「和船とその建造技術保存・研究事業」を実施してきた。この 3 か年で得られた成果を広く一般に公開し、木造和船とその建造技術の伝承と周知・普及に供するため、補足の調査を実施したうえで『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書 とやまの和船(仮題)』を刊行・頒布したいと考えている。

平成 21 年度は、その準備の年として、市内に残る木造船保全作業を行ったほか、比較対象として太平洋側の木造船等の調査を実施した。

### 1. 和船とその建造技術及び漁撈具の实地調査

「和船とその建造技術保存・研究事業」によって、日本海沿岸地域の和船について把握し、富山湾周辺地域の和船との比較・検討を行ってきた。その一方で、太平洋側の和船についても比較・検討していく必要が生じてきたため、平成 20 年度には、瀬戸内海沿岸地域の和船の調査を実施した。今回は、関東地方に焦点を当て、千葉県内に保管されている和船の調査を実施した。また合わせて、福井県の敦賀湾沿岸地域の漁撈具や、廻船についての調査を実施した。

調査は、千葉県では千葉県立中央博物館大利根分館・千葉県立房総のむら・浦安市郷土博物館、福井県では敦賀市立博物館・『北前船主の館 右近家』を対象とした。

千葉県立中央博物館大利根分館には、利根川流域で使用された高瀬船の模型のほか、サッパ舟と呼ばれる川舟が展示・収蔵されている。サッパ舟には、一枚棚構造の小型のものと、二枚棚構造の大型のもの 2 種類があるようだが、いずれも船首部のつくりが富山県の川舟、放生津潟(旧新湊市)のイクリヤ、十二町潟(氷見市)のタズルによく似ている。佐原の町を流れる小野川に繫留されたサッパ、千葉県立房総のむらに展示されているサッパ舟も、それぞれ若干の相違点はあるものの、同系統の舟である。

浦安市郷土博物館では、打瀬船などの現存資料を収集・展示しているほか、ベカ舟などの新造も行っている。船の新造・復元は、浦安舟大工技術保存会によって行われている。当日は、浦安舟大工技術保存会会長で舟大工の宇田川彰氏からも話を聞くことができた。

そのほか、福井県の敦賀市立博物館では当地でかつて地曳網に使用されたマルキブネ専用の櫓である鵜の首櫓などを、『北前船主の館 右近家』では弁才船模型や図面などを実見した。



重要伝統的建造物群保存地区に選定されている佐原の町を流れる小野川に繋留されているサッパ舟。船首部のつくりが放生津瀉のイクリヤ、十二町瀉のタズルに似ている。こちらは平底の底板に 2 枚の棚板が付く五枚合わせの構造となる。



同上。船尾の形状にはあまり共通点はない。

## 2 . 船図面の保全作業

氷見市内の元船大工の旧宅から昭和初期の船の図面（青写真）3 点が発見された。若干の退色と破れはあるものの、保存状態は良好であった。ただし、昭和初期の青写真ということで、そのままではさらに退色・劣化し、見えなくなってしまう可能性があった。そのため、保全のための裏打ち作業とデジタルデータ化を行い、将来的な保管と活用に備えた。

見つかった図面 3 点は、戦時中に日本軍の徴用船の建造を行っていた氷見造船会社が収集したと考えられるもので、和船が 2 点、洋型の木造船が 1 点である。氷見造船会社では、県内をはじめ、能登やその他の地域からも船大工を集めて、日本軍の輸送船などの建造を手掛けていた。今回見つかった青写真はいずれも参考資料として周辺の造船所から集めてきたものと見られる。造船所が特定できるのは 1 枚のみで、朝日町の造船所名が記してある。そのほか 2 枚は、造船所名が記入してあった場所を意図的に破り取ってある。なお、和船 2 艘、洋船 1 艘はいずれもエンジンを積んだ動力船であった。

### 3 . 和船（カンコ）の収集・保存作業

氷見市北大町に長らく放置されていた大型の木造船カンコを保存するための処理を行った。状態が極めて悪く移動すら困難であったため、写真と実測で記録した後、比較的状态の良い船首部分を切断し保存することにした。船首部は一部の材を入れ替え、防水処理を施して保存に耐え得るようにした。解体した部材も合わせて収集した。



氷見市北大町に長らく放置されていた平底の木造船カンコ。風雨にさらされ、劣化が著しい。資料としての保存の方向性を探ったが、移動には船体がもたないだろう、と判断した。結局、実測図を作成し、写真による記録を行った後、解体して部材として保管することになった。その方法も議論の結果、船首部を切断し、形を保ったまま残すことになった。



完成間近のカンコ船首部。切り離した船種部の補強を行った。劣化が著しい部材を一部置き換え、釘、ビスなどで締め直した。表面には撥水剤を塗布した。残りの部材は解体した状態で収集し、保管した。  
写真は作業中の船大工、番匠光昭氏



処理が終了したカンコ船首部。  
このカンコは氷見市地蔵町で地曳網に使われた全長約 8m の大型船。底板と舷側板の組み方に、修繕を担当した番匠氏の流儀とは異なる部分がある。

#### おわりに

今年度は、上記のほかにも、現在所在を把握している木造船の実測図の作成、氷見市内の元船大工からの聞き取り調査を実施している。これらの成果は、次年度刊行予定の『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書 とやまの和船（仮題）』の中で報告したいと考えている。

（文責 廣瀬 直樹）